

## 欧米における家庭教育と幼児教育（講演要旨）

国立教育研究所長 平塚 益徳

### はじめに

欧米における家庭教育および幼児教育では、子どもに対する考え方に、非常な特色があります。

「子どもというものは、生まれながらにして善に向かう根源的な素質と、悪に向かう根本的な傾向の二つを持った、矛盾した存在である」という考え方が強いことであります。決して子どもを天使のようなものとか、神様のようなものとは考えません。いま、各国の子どもに対する考え方の違いを比較検討してみますと、イギリスでは、子どもは悪に向かう傾向や、方向をもっているという考え方が強いのであります。アメリカでは、子どもの善に向かう根源的な素質を重くみており、イギリスとは対照的であります。また、ドイツでは、「モラルは母のひざの上で、乳と共に吸い込まれるものだ」という考え方で、幼少時代からきびしくしつけております。ソ連では、子どもというものは、環境次第でどうにもなるものであると環境を非常に重視しております。フランスでは、合理性を養うことに重点をおき、幼少の時代から、厳格な訓練としつけによってすべて理性的に行なうようにしています。

このように、子どもに対する考え方は各国によって異なりますが、子どもの中には、純真さと、おろかさという二つの面があります。したがって、このことを考えずに育てたならば、動物的な人間になってしまうでしょう。さらに、たいせつなことは、子どもというものは、放任しておけば、本能的な面や、動物的な傾向だけが強くなってしまふということを知っていなければなりません。

この二つのことから、幼い時代に、良い面を伸ばし、悪い面はおさえ、ためることがたいせつであります。あの人格主義に徹したカントは、「幼い時代に自己の行動を抑制することを知らされなかった者は不幸だ」と強くいっているのであります。

自分の欲求をおさえるということは、自分を社会化することであり、人間は、自己保存の本能がなければ育たないのであります。しかし、自己保存の欲求をみえすこともたいせつであります。こればかりでは、子どもは、体だけ大きくなって、心は動物的になり、自分勝手な人間になってしまうのであります。そうでなく、本能的・動物的な面をため直して、少しでも人のためになることに向けていくことが、しつけであり、道徳教育であります。

欧米では、家庭教育、あるいは、幼児教育の全体の考え方の中には、しつけが根本になっております。要するに、子どもというものは、かわいい面も、純真さもあります。この二つを保たせながら、もう一つのおろかさを常にためるところに、幼児教育の原理があるという考え方であり、この点宗教的であります。

それに比べ、日本の道徳教育は、欧米と違って、学問的でなく、気分的です。子どもはかわいいに違いないが、悪の芽を持っています。その悪の芽を出させないように、しつけなければならないのにそれをおろそかにしています。この点、日本の家庭教育は、最初の出発点から間違っていると思います。

つぎに、欧米先進国の家庭教育・幼児教育で注目すべきことは、自由国家群においては、いずれも、宗教というものが、非常に大きな役割を果たしているということであり、宗教が、家庭の中にしっかりと根をおろし、生活の信条となっていることであります。さらに、欧米においては、宗教音楽が、家庭

の中、あるいは、社会の中にあるということに注目すべきであり、これが自由国家群の特色であります。もう一つは、人間は、環境の動物であるという考え方であります。“人間は、環境によって支配され、また、環境を支配する” 幼い時ほど、環境に支配される面が強いのであります。この考えの一番強い国はソ連であります。ソ連では2・3才までは、完全に環境に支配され、その影響は、17、8才まで続くと考えているのであります。これが、ソ連の幼児教育を非常に尊重している理由の一つであります。

## 1 イギリス

欧米における家庭教育でもっとも模範的な国は、イギリスであり、アメリカ・フランス・ドイツはもちろん、ソ連からもほんとうに尊敬されています。いま、イギリスの家庭教育・幼児教育の特色というべきものをあげてみますと、まず第1に幼児教育に対する考え方として、イギリスでは、子どもの態に向かう傾向について、強い認識をもっており、この芽を幼い時代におさえることがたいせつであるというので、幼い時から、きびしいしつけをしていることとあります。このしつけは、上流の家庭ほどきびしいのであります。その理由としては、“上に立つ、は、それだけ一般の人より責任がある” という考え方からであって、上流階級として、恥ずかしくない責任ある教育を幼少の時からするのであります。

また、イギリスでは、「よき模範」ということを尊びます。その意味は、あこがれをもって、よいものに、私しゅくすること、つまり自分をよい模範に向けて努力していくこととあります。全体がこういう空気になっており、これが、イギリスの家庭教育の根本の傾向といえることができます。

第2に、イギリスでは家の歴史を尊び、祖先を尊んで、い家風、秩序ある家庭を作ることと努めます。なお、イギリスの家庭を、「城のようだ」といいます。この城ということに二つの意味があるのであります。

その一つは、イギリス人は、やたらに人を近づけない国民、人を家庭によぶことを喜ばないのであります。もう一つの意味は、秩序があるということとあります。このように、イギリスの家庭では、秩序があり、そのうえに落ちつきがあります。この落ちつきといことは、道徳教育の上において、非常にたいせつな要素であるのであります。

そのほか、イギリスの家庭教育のよい面としてみられる点は、親団らん時間がじゅうぶんにあることとあります。また、イギリスでは、愛国心や国旗に対する対などは、すべて家庭に在る間（幼児期）に教えられます。教えるというよりも、父母、兄弟のよき姿を見習って、知らず知らずのうちにそりなってしまうという教え方であって、たえず、家庭内で、よき模範がくり返されているうちに、自然としつけができていくのであります。

このように、イギリスでは、よき家風があり、秩序ある落ちつ家庭がありますが、さらに、子どもは、幼児期から、「ブリーズ」と「サンキュー」という、謙きよことを教えられます。また、善悪のけじめを、けっけりもつように家庭内のよき模範と、きびしいつけのくり返しによって訓練され道徳教育がなされています。

## 2 ソ連

家庭教育の発展に中絶の価値ある貢献をしたクルゴスカヤは、新しい社会主義的家庭の問題、夫婦、男女間の正しい相互関係の創造の問題を鋭く提起し、ソビエトの家庭、個人的生活と社会的生活を結

合し、新しい人間・共産主義社会の建設者—を育てる親密な集団であるとみなしたのであります。

マカレンコは、ソビエトの家庭教育の特色を解明し、その目的を考察しました。彼は、家庭における教育活動の本質は、単に子どもに対する直接的感化だけでなく、家庭の組織化、両親の個人的・社会的生活の組織化にもある、ということを教えました。

ソビエト政府は、児童相談所、託児所、幼稚園、遊び場、寄宿学校、長日制学校、校外施設、保健政策のシステムなどを利用する実際上の可能性を提供することによって、家庭における子どもの訓育と教授に対し、できる限りの援助を与えているのであります。

ソ連では、教育施設で行なわれる教育に比べて、家庭教育は固有の特色を持っています。すなわち、家庭集団の成員が肉親という自然の関係と、相互配慮とによって結ばれていること、子どもたちがおとなの指導のもとにおとなといっしょに家庭労働へ参加していること、教育が子どもに対する両親の愛情で貫かれていることがその特色であります。

家庭における子どもの正しい教育のもっとも重要な条件は、親が共産主義教育の目的と課題、ならびに社会や国家に対する自分の責任を理解していることであります。家庭の中での労働的ふん囲気と家庭成員間の親しい、暖かい相互関係をつくり出すこと、および親のよい手本と親の權威があることが特別な意義もっています。

幼児期における子どもの家庭教育は、主として、彼らの世話をする過程で行なわれますが、そのおもしろいものは、子どもの健康維持、食事、衣服などについて配慮しながら、親は子どもを生活機能のさまざまなあらわれにおいて自主性に慣らし、彼の積極性と忍耐力を育て、彼の運動の発達とことばの発達を指導します。

就学前年齢の子どもでは、身体教育・知的教育・道徳教育・労働教育・美の教育に関する家庭の仕事はいちじるしく広がります。この時期の教育の基本的な手段となるのは、両親による子どもの多様な活動の組織化ということでありま。

就学前児童の発達上大きな意義をもつのは遊びであります。親は、学校へ入学するまでに子どもがセルフサービスの習慣を獲得し、複雑でない委託を遂行でき、能力相応の家庭労働にまれ、観念と概念のじゅうぶんにたくわえをもち、自分の思想を表現できるように配慮します。

学齢初期の子どもの家庭教育は、主として学習との関連でおこなわれ、親は、生徒である子どもを秩序・組織性、および宿題遂行の際の自主性に慣れさせ、彼を監督し、困難な場合には彼に援助を与えますが、子どもが少年期に入った場合も子どもに対する活動は同一の方向で続けられていきます。

幼児本来の生活の場所が、家庭であり、したがってその最初の教育が両親、とくに母親であることは今日一般に認識されております。フレーベルは「幼稚園は学校の教室のようにでなく、家庭のように」と有名なことばを残しておりますが、ソ連でも西欧先進国のように、幼稚園やナースリー・スクールを両親教育のセンターとして大いに活用しております。

### 3 アメリカ

アメリカでは、幼少時代に、「受けるよりも与えることが幸福である」というバイブルの教えにもとづく善行がしつけられ、いろいろな機会を通じて、肉親、知友からはじめて、公共施設に対してすら、喜んでものをプレゼントし、進んで寄付をするよい習慣をうけつけられています。

さらに、家庭教育の特色は、小動物を可愛がるよい気風が養われていることでありますが、これは、

アメリカに限らず、ヨーロッパ各国に共通して見いだされる特色であって、アメリカでは、特にこの面の教育が徹底しています。

このように、アメリカにおいては、家庭教育の重要な柱として、人に物をささげる教育、小さな動物を大事にする教育などを中心にしたヒューマンイズムの教育が確立されているのであります。

また、アメリカでは、アメリカ一流の家庭教育を重視しています。では、彼らが家庭において道德教育のいかなる面に特に力を入れているかという点、しつけであり、社会道德であります。元来、しつけの根本精神は、それなしにはわがまま放題になりがちな子どもたちに対し、まず他者の存在を意識させ進んで他者に不快感をもたせたり、迷惑をかけたりしないように心がけさせ、さらに、また他者を進んで尊敬する態度や、言行を身につけさせることでもあります。

したがって、このしつけは、人間が社会生活を営む場合に、必ず身につけなければならない基本的な態度であります。自己を抑制し、他者に不快感を与えないために心がける態度を身につけさせることは、各人をして正しい人間関係に入らしめる第一歩であります。

しかも、こうしたしつけは、まず、第1に、家庭にみぎる落ちついた好ましいふん囲気と、父母長上の自然な巧まない生活態度からの感化にまつところが多いのであって、ドイツのことわざの「モラルは各人が母親のひざで、母乳とともに吸収するものだ」という句は、この間の消息を示すにじゅうぶんであろうと思います。

また、アメリカの家庭教育では、特に個性尊重を重視し、個性の独立にふさわしい環境が提供されているのであります。

つぎに、アメリカの道德を考えるには、まずアメリカのデモクラシーが、開拓者の生活経験によっておのずから生成されてきたものであることを理解しておかなければなりません。そして、このデモクラシーの社会は、個人みずから責任を負う人たちによって形成されたもので、社会の公共の善は、おのこの家が中心となっている地域の経済生活から、発展した道德であったのであります。

アメリカの道德教育を説く場合、アメリカの家庭生活における習俗（モラル）の実践について述べる必要があります。アメリカの家庭では、一般に主婦の權威が強く、母親のいうことが子どもによく通じます。家庭環境の内容は子どもにとってたいせつな道德教育の機会ではありますが、アメリカの家庭での食事の様子を見ますと、家族が食堂でいっしょに食事をしている間に、社会環境に適応しながら社会の一員としての生活が、学習としてなされるように、配慮が払われています。なお、家庭のなかで、親子兄弟がいっしょに生活することは、おのずから社会的性質をもつものでありますが、それは日々の母の仕事の手伝いや、清掃、花壇の手入れなどをやらせることによって、ものごとをはっきり順序だてて考える習慣や、考えを組織だて、物事を整理する力を養うことにもなります。

#### 4 ドイツ

ドイツでは、「幼少時代に、自分の欲求を抑制することを教わらなかった人は一生不幸だ」という有名なカントのことばがあり、道德教育や、しつけは、まず家庭生活を通じて体験させているのであります。このドイツで注目すべきことは、中等学校までのあらゆる学校の授業は午前中で終わってしまうこととあります。その理由は、この国の長い伝統的な考え方の一つとして、学校教育は、知的教育を受ける場所であって、道德的・情操的な教育は各家庭で行なうべきであるというように分担が定められているからであります。この点で「モラルは母のひざの上で母乳と共に吸い込まれるものだ」ということわ

ざが、ドイツに生みだされているのは、不思議なことではありません。

とくに、この国の婦人は「子どもをたいせつにする」ことであります。そのたいせつにするということの内容は、決して甘やかすことではなく、むしろきびしく社会性をしつけることでありまして、大いに模範としてよいところであります。なお、ドイツでは、子どもを溺愛する母親を軽べつし「動物的な母」と呼ぶことが注目すべき点であります。

イギリス以上に徹底的に戦禍をこうむったドイツがその力強い立ち上がりに何をまずとり上げたかといえ、実に家庭生活における幼児教育の振興であったのであります。

## 5 フランス

フランスの家庭教育は満2才から始まり、家庭のしつけについて学ぶべき点が二つあります。その一つは、秩序を重んずるということ、もう一つは、合理性を養うということであります。このために、幼児期から非常にきびしい訓練をします。そして、理性ということが、フランスにおける家庭、および一般社会の合い言葉になっているのであります。

また、本国語を非常に尊重し、フランス語の正確な訓練に努力を払っています。

なお、フランスのカトリック的な考え方においては、教育権は最終的には家庭にあるべきものであり、学校は家庭の委託を受けて子女の教育に当たるといった考え方が強いのであります。したがって、人格形成の中心ともいべき道徳教育は、まず、各家庭において責任がとられます。本来教育的、倫理的的色彩に富むキリスト教は、子女の教育に対する家庭の重要性を強調してやまないものであります。

すでに、原始キリスト教時代、「家なる教会」と呼ばれた聖なる家庭、教会として神を礼拝する聖所としての家庭すら存在していたのであって、欧米各国を通じて、キリスト教徒の家庭こそ、まず第1に人格教育の道場であったのであります。もちろん、その色彩の強弱についての差異はあるとしても、正常な信徒の家庭において、少なくとも子女の道徳教育に対して全く無関心で、放任的な家庭は、まずないものと断言してよいでしょう。しかも、こうした家庭における道徳教育は、教会の教えと直接、間接につながりをもっていることはいまでもありません。

以上のように、日本と西欧の家庭や家庭教育をながめてみますと、まず、家庭のあり方に根本的な差のあることが明らかであります。すなわち、日本では家を中心とした道徳体系が破壊されており、今日あるものは、家庭的機能を果たさない楽しみの少ない家であるし、教育の機能を失った家であります。

この家を失ったために、今日の日本の社会生活は生活のより所を失い、人々は孤独とせきりょうに悩み、生活はまさに分裂と崩壊のせとぎわに追いこまれているといっても過言でないと思います。

これに対して、西欧では、堅固な家庭をもっているゆえに、経済生活の激動や、あるいは近代の人間関係の緊張にも耐えていけるのであります。西欧の個人主義は家を防壁とした個人主義であるということができますし、また、民主主義の基礎は家庭生活であるということもできましよう。

ところが、日本ではこの家が欠損しているために、個人生活を支えたり、民主主義を維持していくためには、すくなく政治や國家權力にすがらうとするのであります。アメリカや西欧諸国においては、家庭の役割を強調し、子どもの福祉は家庭において守らなければならないし、家庭を強化し、健全化することによって児童福祉の問題を解決しようとしてきました。この政策の違いは、日本と西欧の家庭生活のあり方をみればうなずけるのであります。

つぎに、家庭教育のためには、母親を中心とした、近代的母系家族であることが望ましいのであります。それゆえに、日本では母親の家庭教育に対する自信の欠如を救済しなければならないと思います。

（この講演要旨は、昭和39年10月24日第3回幼児・家庭教育研究会において、国立教育研究所長  
文学博士平塚益徳先生からご講演いただいたとき、記録係をつとめた安宅研修員がまとめたものであ  
る。 文責 教育研究所